

だと聞いた、自分は此話によりて愈々此地に望を抱いた、尤も此時より少しく前にスタイン氏が敦煌に行つたことは知つて居たけれども、尙ほ／＼期する所があつたのである、それで敦煌につくとすぐ Wang-tao を尋ねてそれこれ相談をしたが、彼は直ちに承知をして自分を洞に案内して呉れた、そうして或龕を開くや否や、三メートル許りの大きさの洞の中に、二列或は三列に人の高さ位に重ねられた書籍の束を發見した、重に巻物になつて居るものであつたが、中には一枚々々のものもあり、支那、西藏、ウイグル、サンスクリット文字等あらゆる種類のものが集まつて居た、此際に於ける自分の感想は宜しく御推察を願いたい……幸に Wang-tao は學問がなくて然も建築好きの男で、此頃觀を立てる爲に金が要るといふ有様であつたから、書物を買ひ取る話はすゝんだが、それでも彼が郷人の非難を恐れたが爲めに、悉く之を得ることは出来なかつた、自分は殆んど狂的に三週日の間洞の中にしやがみ込んで、書籍の目錄を調製した、こんな風で一萬五千卷（千五百卷とあるけれども誤植と思ふから訂正する）ばかりに目を通したが、その三分の一程をより出して之を買ひとることにした、そうして此中には洞中の書の、ウイグル及びブラーミー語のもの全體と、西藏及び多くの支那の書物等が含まれて居る、支那學者の爲には實に貴重な資料といはねばならぬ、もとより重に佛教關係の書物ではあるが、尙ほ歴史、地理、哲學、文學及び、諸種の法令、戸籍、統計、日誌等種々の性質のものがあつて、（イラストレーションには外に道教、ネストリアン等の最古のマニユスクリプト、摩尼教典の斷片、曆、私の記録等を得たことがかいてある）おまけに之が悉く十一世紀以前のものばかりである、千〇三十五年に東方からの侵略があつた時に、（西夏の趙元昊の侵入のことゝ思ふ）僧侶等は繪畫や書物を洞窟の中に隠してお